済州市方言との出会い

鄭　相哲

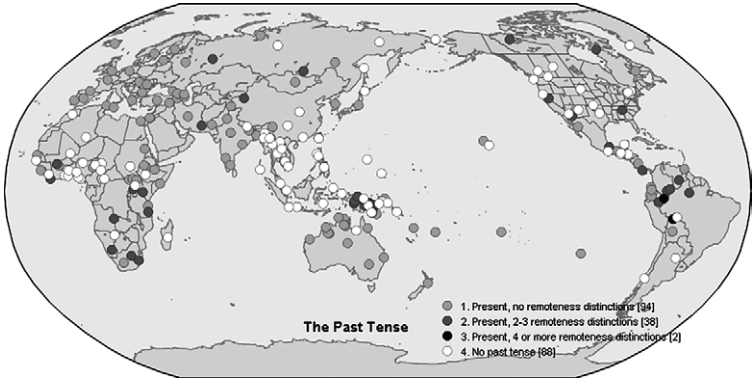
韓国済州道は三多道ともいわれる。つまり、風と石と、そして女性が多いという意味である。しかし、長い間本土と地理的に歴史的に孤島していたので、気候や文化や食べ物にも非常に個性的な特徴があり、言葉、言い換えれば済州方言も共通語だけではなく、他方言と比べても異質的なところが多く面白い。私が済州市方言を研究対象にするようになった背景には、三つの前提があったような気がする。

まずはＷＡＬＳである。二〇〇五年頃言語類型論という言語学の研究分野から、Beard S. Comrie を中心とした国際的な研究者達の共同研究の成果の一つとして、ＷＡＬＳ（world atlas of language structures ： http://wals.info）が発表され、学界から注目された。現在は誰もが簡単にアクセス可能であるし、最新情報もアップデートされ続けている。一つだけ紹介すると、過去テンス（tense）を例にしてみよう。共通語として日本語は「シタ」という一つの形態しか持たないのに、世界言語の状況を次の地図に表示されているように、二つも三つも過去時制形態を持つ言語が存在し、しかも分かりやすく一目瞭然で驚かされる（その理由は問わないとしても）。当時私の場合もその成果に圧倒されてやや知的な興奮状態に陥り、言語類型論という分野に強い関心を持つようになった。図一はそのなかから過去テンスについての世界地図を引いたもので、一つしかない言語から四つ以上ある言語までいろいろある。

第二は、日本の方言研究の成果である。概略二〇〇〇年頃に入ってからテンス・アスペクト・ムードについての体系的な大規模な方言研究が進められ、その成果が公刊されてきている。以下現在熊本県松橋町で用いられている方言の例であるが、工藤編（二〇〇四）によると、この方言では「一時性」をマークするために二つの形容詞の形があるという。

・アラスカワ　サンカ（アラスカは寒い）
〈恒常的本質〉
・キョーワ　サンカリヨル（今日は寒い）
〈一時的現象〉

この方言では動詞連用形に「〜しよる」という形態がついて主に「動作継続」の意味を実現するが、この形態が形容詞にもついて一時的な現象を表わすという。この現象が注目される理由は単に共通語と違うというのではなく、韓国済州市方言の形容詞にも同様な現象（하염쩌）があるからであり、さらに



図一　過去テンス

は世界の他言語との共通性が見られるからである。

- He is/is being kind.
- O carro está limpo.（その車はきれい（な状態）です）
- Os senhores são japoneses?（あなたがたは日本人ですか？）
- 지로 얼굴 벌겋헌다／벌겋하다／벌겋하염찌。（次郎の顔、赤い）（済州市方言）

英語（特に黒人英語でよく使われるようであるが）ではbe動詞を重複して使うことで傍線の方（He is being kind）は〈一時性〉を表し、「親切なふりをする」といった意味になる。次はポルトガル語（スペイン語）の例であるが、よく知られているようにこの言語ではestarの方が〈一時性〉を表わし、serの方が〈恒常性〉の意味を実現するという。

このように〈一時性〉と〈恒常性〉という時間的限定性に関わる現象は、日本語や韓国語など個別言語の特殊な現象というより世界諸言語で観察される現象であると言えそうである。

第三に、大学院博士課程に済州市出身の学生が入ったことである。その学生と何回かにわたって済州の文化や方言、食べ物などについて話し合っているうちに、済州市方言のテンス・アスペクト・ムードといった述語構造が韓国共通語とあまりにも違うのに気づき、本格的に方言調査をしたくなったのである。

沖縄には「ウチナーヤマトグチ」という言葉がある。戦後沖縄で用いられるようになった新しい方言のことを指す言葉である。直訳すると、ウチナー（沖縄人）＋ヤマトグチ（標準語）ということになるのだろう。済州市方言も沖縄首里方言との共通性が多い。例えば、歴史はと

もかく、地理的に交通が不便な島であり長い間本土から孤立していて、古い形態を保持している点や、その影響か分からないが、首都発の共通語から見れば、外国語のような印象を与えている点などである。また、マスコミや交通の発達で共通語化が急速に進んでいることも類似している。「ウチナーヤマトグチ」という言葉もこのことを象徴しているし、その反映であろう。

二〇一〇年頃、筆者が済州市に行った時、伝統方言の話者を探すのに苦労した記憶がある。当時既に八〇歳以上で島から離れたことがないインフォマントを見つけるのはなかなか難儀なことだった。今は八六歳以上の方々ということになる。このことは裏を返せば、伝統方言の話者がだんだんなくなりつつあるということであり、その方言が消滅危機に面しているということになる。昔から方言を禁止したり、方言で言うと恥ずかしく思ったりしたことはよく知られていることである。しかし、個々の方言もそれぞれ立派な語彙や文法体系を持つ立派な一つの言語であり、無形文化財の一つである。

参考文献

工藤真由美（編）『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系―標準語研究を超えて―』ひつじ書房 二〇〇四年

Martin Haspelmath, Matthew S. Dryer, David Gil, Bernard Comrie (eds.) *The World Atlas of Language Structures*, Oxford University Press, 2005.

（韓国外国語大学教授／国際日本文化研究センター外国人研究員）